

【一般演題3】 第11席 「『説文解字』に現れる医学用語と医学思想について」

埼玉 藤山 和子

『説文解字』は、後漢の許慎が文字の正確な解説こそは古典研究—学問研究の第一歩、ひいては国を治める第一歩であるとの認識のもとに編集した字書である。許慎の自序によれば、その材料となったのは秦の丞相李斯の手になる『蒼頡』、車府令趙高の『爰歴』、太史令胡毋敬の『博学』、前漢楊雄の『訓纂』などの文字学習書であったことが分かる。また、許慎の子の沖の言によれば、許慎は編纂にあたって広く先達の見解をたずね、取捨選択を加え、六経の訓詁から、世間の人事に至るまで「畢く載せざるはなし」という。

このような『説文解字』には医学に関連する文字も多く採用されている。それらの文字と『黄帝内経』に使用されている文字とを比較してみると、出入するところが多い。許慎の依拠したものが文字の学習書であったこと、採用した文字は小篆を基本としていたことを考えれば、これは当然のことといわなければならない。また、それら医学関連の文字につけられた解説も、必ずしも『黄帝内経』の内容と一致するものではない。『説文解字』は字形を解くことを主とする字書であることを考えれば当然のことといわなければならない。しかし、それにもかかわらず説解中に医学書の影響がみられることがある。

甲骨文が発見され小篆との比較が可能となった現代からみれば、許慎の説明にも誤りがない訳ではなく、特に、当時の十分に高度に発達した文明社会の自然観なり哲学なりを背景にして文字の形を説いたところは、事実からかけ離れた説明となっていることが多い（『説文入門』）。しかし、いまここではその説明の適不適は問題ではなく、当時の最新流行の医学思想がどのようにそれら説解に反映しているかが重要で、それについて述べる予定である。それが『黄帝内経』の成立年代を推測する資料ともなり得ると考えるからである。